

郷土博物館・文学館だより



今年の10月1日は、区制が施行されてからちょうど80周年だった日でした。当館では、それを記念し企画展を開催しました。第一弾は、大正から昭和初期にかけて歌われた流行歌を取り上げ、9月22日から11月25日まで開催しました。

区制施行80周年記念企画展

流行歌を創った人たち — 渋谷ゆかいの作曲家 —

当時、流行歌を作曲した代表的な作曲家として、中山晋平と古賀政男を忘れてはなりません。二人とも渋谷に居を構えたことがあり、古賀邸の跡地は、現在、古賀政男音楽博物館になっています。

中山晋平は大正時代から「アメフリ」「砂山」など、みなさんがきっと一度は歌ったことのある童謡をたくさん作曲しましたが、彼が作曲家として最初に有名になったのは演劇「復活」の劇中歌「カチューシャの唄」でした。これが日本の流行歌（のちに歌謡曲）の最初の曲といわれています。その晋平に続いて、当時の人びとの心をつかんだのが、ご存知「古賀メロディー」の古賀政男でした。彼はたくさんの曲を次々に作曲、ヒットを



11月3日に行われた展示解説風景

連発し日本を代表する作曲家になりました。

展示では二人の生い立ちと初期作品を紹介しながら、区制が施行された昭和7年（1932）頃の渋谷の様子も紹介しました。

「ジャリ電」とも呼ばれた 玉電

渋谷駅前に砂利置き場があった、という話を聞いたことがありますか。今から百年ほど前の渋谷駅周辺の写真の中に、砂利の山がみえる写真があります。この砂利を運んできたのは、当時の玉川電気鉄道、通称「玉電」でした。

明治40年(1907)、当時の東京市の西郊に玉川電気鉄道が開通しました。最初は「三軒茶屋」と「道玄坂上」との間の運行でしたが、すぐに「玉川」まで延長され、ついで「道玄坂上」「渋谷」間も開通し、同年のうちに「渋谷」と「玉川」との間が全通しました。この鉄道は、もともと東京市内の建設・土木事業等で使用するための多摩川の砂利を運ぶことを主要な目的として建設されました。つまり、渋谷駅前の砂利は多摩川の河原の石だったのです。客車のひく貨車に積まれて渋谷まで運ばれた砂利は、ここから馬車などで市内に運ばれました。

大正時代になると、玉電の路線は山手線の真下をくぐって、現在の明治通りまで延びてゆきます。まず、大正11年(1922)に「渋谷」と「恵比寿駅前(のちの渋谷橋)」の間が開通し、翌年には「天現寺橋」まで路線が延長されました。さらに昭和2年(1927)には「恵比寿駅前」から「中目黒」を結ぶ路線も開通します。

急速に路線を拡大してきた玉電でしたが、昭和13年に東京横浜電鉄に吸収合併され、同社の玉川線となります。そして、「渋谷」「天現寺橋」間の路線は、東京市に経営が委託され、砂利輸送も廃止されました。14年になると、玉電の渋谷駅は、新たに建設された玉電ビルの二階に設けられました。同ビルの三階には前年に東

京高速鉄道(現東京メトロ銀座線)が入っており、玉電の隣には昭和2年に帝都電鉄(現京王井の頭線)が開通していましたから、この時期、渋谷駅周辺の景色は大きく変わりました。

ビルの二階を出発した電車は、一般の線路を通ったあと、道玄坂上に出ました。かつてはここに「道玄坂上」という停留所もありましたが、昭和17年に廃止されたため、以後、最初の停留所は、もう少し坂を登ったところにある「上通」となりました。道玄坂を登り切った玉電は、旧山手通りを横断すると、世田谷方面に向かって下って行きました。

昭和44年5月10日に玉電が廃止された際は、大勢の人が沿道に出て、電車との別れを惜しみました。玉電の廃止後、その乗り場や線路があった場所は、長距離バスの停留所やバス専用道路として使用されたため、かつての面影を残していましたが、平成12年(2000)、ここに渋谷マークシティが完成したことにより、それも失われてしまいました。「ジャリ電」とも呼ばれた小さな電車が行き来していたことを想像することは、もはや難しくなっていました。



明治40年頃 渋谷駅前の玉電

独歩の療養生活を支えた『二十八人集』

文学史上に名を残す国木田独歩は、明治 41 年（1908）に 37 歳という若さでこの世を去りますが、その生涯はまさに「駆け抜けた」といえるものでした。

明治 20 年、16 歳で山口から上京した独歩は、民友社系の『青年思海』の同人となり、東京専門学校英語普通科に入学、カーライル、ワーズワース、ツルゲーネフなどに親しみます。

明治 26 年には、徳富蘇峰の紹介、矢野龍溪の推薦で大分県佐伯の教員として赴任、ここで終生の文学的テーマを発見したといえます。翌年、教え子 4 人をともなって再び上京、国民新聞社に入社して従軍記者となり、『国民新聞』に「愛弟通信」を連載して話題となります。

明治 28 年、独歩は蘇峰の尽力もあって佐々城信子と結婚しますが、裕福な家庭で育った妻は、収入の安定しない生活に耐えることができず、結局、この結婚は翌年には破綻し、傷心の独歩は雑木林が点在した渋谷の地に移住します。ここで、自然観察と詩作の日々をおくりますが、この体験は独歩に深い内省を促すこととなりました。

次第に自分らしさを取り戻した独歩は、明治 30 年に麹町に転居、榎本治子と翌年再婚し、長女も生まれて精神的な安寧を得ますが、窮乏生活は変わらず、西園寺公望邸に一家で寄寓した時期もありました。

それでも、明治 34 年に小説集『武蔵野』（民友社）を刊行、そのほか、さまざまな雑誌に

「少年の悲哀」「空知川の岸边」「春の鳥」などの作品を精力的に発表します。一方で明治 35 年から敬業社（のちの近事画報社）に入社し、編集者としても腕をふるいますが、近事画報社が解散後の明治 40 年、新たにおこした独歩社が翌年には破産、金策に奔走する日々は独歩の体をむしばみ、ついには肺病を患います。

病状が悪化した独歩は、茅ヶ崎のサナトリウム・南湖院に入院しますが、入院費もままならない状態でした。こうした独歩を助けるため、明治 41 年 4 月、花袋と小栗風葉の編で『二十八人集』が刊行されます。題字は西園寺公望、序文は蘇峰で、花袋をはじめ島崎藤村、徳田秋声、太田玉茗、柳田国男といった友人たちが文章を寄せた本書の印税は、独歩の療養費にあてられました。しかし 6 月、独歩は帰らぬ人となってしまいます。

独歩の最期は、前田晁の『明治大正の文学人』や花袋の『東京の三十年』に書かれています。「国木田君は死花が咲いた」という弔客の言葉には、話上手でユーモアにあふれ、多くの人びとに愛されたという独歩の生前の姿が偲ばれます。



『二十八人集』
明治 41 年刊、新潮社



収蔵資料紹介

「電気アイロン」 (「電気^{ひのし}熨斗」)

今回ご紹介する資料は区内の旧家に残されていた戦前のアイロンです。あまり古いものには見えないかもしれませんが、今から八十年以上前に作られた初期の家電製品です。

現在のように家電製品が日本で普及したのは戦後の高度成長期以後のことです。戦前には、ラジオ、アイロン、扇風機程度しか普及していませんでした。

アイロンが普及する以前は、古くから「火熨斗」が使われていました。これは金属製の器の中に火のついた炭を入れ、熱くなった金属部分を布に押し当てて使用するものでした。しかし、火熨斗は温度調節が非常に難しく、焼け焦げができません。時には灰や炭を衣類に落とし汚してしまうなど、使用には経験と技術が必要で、大変負担となる作業でした。こうした悩みを解決する道具として普及

したのが、電気アイロン（電気火熨斗）でした。構造としては、本体の中に電熱線をはしらせ、そこに電気を流すことで熱を発生させるものでした。

国産第一号機は、大正四年（一九一五）に芝浦製作所（現・東芝）が発表した製品で、価格は、現在の金額で一台四、五万円に相当する高価なものでした。ただ、それでも多くの人が購入したいと思うほど便利で魅力のあるものだったようです。とはいっても、この当時のアイロンには、まだ温度調整機能がなく、使用するには、適温になったかどうか指で確かめる必要がありました。『婦人倶楽部』（昭和六年五月発行）によれば、指の先でアイロンにつけた水が、「ジュー」といえば熱不足、「ピュー」といって水を弾き返せば適温と書かれています。

【開催予定の展示】

企画展「独歩・花袋・国男 丘の上の青春」

平成24年12月8日（土）～平成25年3月24日（日）

文学史上、多大な功績を残した国木田独歩・田山花袋・柳田国男は、渋谷の地で文学を語り合う時代がありました。区制施行80周年・柳田国男没後50周年を記念し、3人の交流を紹介します。

■展示解説

平成25年1月26日・2月16日・3月16日

いずれも午後2時から学芸員による展示解説を行います。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00（入館は16:30まで）

※震災に伴う節電を継続し、開館時間を13:00から変更しています。詳細については、お問合せください。

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1名以内は10名以上の団体料金
100円以上の方、貸出のある方と付添いの方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.21

平成24年12月1日発行